樋爪館
比爪館
肥爪館
火爪館

ひづめだて

2023(R5).10.26
第１４８号
樋爪館懇話会

事務局　〒028-3310 紫波町日詰駅前1-10-2　赤石公民館内　Tel 019-676-3999

紫波町の歴史を学ぶ　赤石小学校６年生が史跡見学

赤石小学校６年生は、紫波町内の史跡見学を通して、郷土の歴史に対する興味や関心をもたせることを学習のねらいとし、現地において史跡見学が行われた。

この一連のカリキュラムとして、世界遺産「平泉」の出前教室、そして社会科で平安時代から鎌倉時代のかけての歴史を学び、今回の町内史跡見学、次が平泉中尊寺等の史跡見学とのことである。

高水寺城跡にて赤小６年生と樋爪館懇話会の講師

史跡見学には、樋爪館懇話会の遺跡案内人部会が分担して講師になり、９月１３日が樋爪館跡・五郎沼周辺、そして、２７日が陣ケ岡史跡と高水寺城跡を説明した。子ども達は、目を輝かせ熱心にメモをとったりし、郷土の歴史を学ぶに一日であった。

奥州藤原氏の足跡を訪ねて　会員現地研修を行う

十二世紀、東北一円に力を及ぼした奥州藤原氏の平泉関連資産である樋爪館は、藤原一族である樋爪氏の拠点として、平泉に匹敵する権力中枢があったともいわれている。

このような係わりの下、本会会員のさらなる奥州藤原氏の見聞を広げるため、１０月１５日に平泉世界遺産ガイダンスセンターと構成５資産等において現地研修を行った。

ガイダンスセンターは、世界遺産を訪ねる出発点でもあり、展示物を音声ガイド機により分かりやすい解説があった。次に世界遺産巡りでは、古都ひらいずみガイドの会がガイドブックには載らない地元の話しなどもあり、平泉文化の理解がより深められた。

雨が降る中、古都ひらいずみガイドの会が平泉世界遺産等を分かりやすく説明された。

毛越寺跡の池をいわば一望できる場所にある臨時展示室。お堂の中に毛越寺の水路が安置されている。

≪≪≪１１月～１２月行事予定のお知らせ≫≫≫

１１月１５日 （水曜日）	第１４５回 **月例発表会**	時間：午後７時～９時 場所：赤石公民館 和室 発表者 浅 沼 幸 男 テーマ 落ち延びた斯波詮直と稲藤大炊介一族の動向 発表者　宮　　良 男 テーマ 日本の仏教㉑ 曹洞宗(1) 永平寺と道元
１２月　３日 （日曜日）	第３０回 **定期講演会**	時間：午後１時３０分～３時３０分 場所：赤石公民館 講堂 演題　戦国期の斯波御所と高水寺城 講師　花巻市教育委員会 文化財専門官　室 野 秀 文 氏 会費　会員２００円　会員外５００円

令和５年９月２０日・１０月１８日に開催した月例発表会において、発表者が用いました資料から一部抜粋し、さらに文章は縮めて掲載した部分もありますのでご了承願います。

宇部真澄の「陸奥話記を読む」

（５）将軍源頼義、軍勢を差し向ける

将軍はますます怒って大いに軍兵を参集した。陸奥の国内は号令に恐れおののいて、こだまが返すように命に従った。この時、安倍頼時の女婿の散位藤原朝臣経清と平永衡らも、すべて舅にそむいて、手勢を率いて将軍の陣に加わった。

（６）永衡殺害に恐れ、経清離反す

将軍は軍兵を率いて次第に進んで、衣川に着こうとする頃、永衡一人が銀の兜をかぶっていた。ある人が将軍に疑いを述べた。「永衡は、たぶんこっそり密使を通わせて、官軍の兵士の動向や作戦の命等を知らせているでしょう。さらにかぶっている兜が皆と同じでないのは、きっと合戦に及んだ時に自分を射させないためでしょう。早々に彼を斬って内通を断ち切るのが上策と考えます」と。将軍はその通りだと考えた。

すぐに兵を動かして、永衡とその一味同心の四人を捕えさせ、その内通の罪を責めて即刻斬った。

そこで経清らは恐れて不安に思った。軍事顧問に相談して言った。「私もいつか殺されるであろう。どうしたらよかろうぞ」と。顧問は勧めた。「讒言されないうちに謀反して逃げ、安倍の大殿につくのが得策です」と。清経は「そうしよう」と承諾した。

（７）金為時、援軍なく敗戦、経清逃亡す

かくして頼義将軍は気仙郡の郡司、金為時らを派遣して頼時を攻撃させた。頼時は弟の僧良昭らに防戦させた。為時はかなり有利に戦っていたものの、しかし後詰の援軍が一戦して退却した。かくして経清らは大軍混乱の間に、私兵八百余人を従えて頼時の許に逃げ帰った。

（８）新国司着任せず、頼義が再任される

朝廷は陸奥国の新しい国司を補任したけれども、合戦と言う消息を聞いて、辞退して赴任しなかった。そこで改めて頼義朝臣を再任させ、頼時征伐を行わせることにした。

（９）天喜五年九月の国解、頼時討伐を報ず

天喜五年秋九月頼義朝臣は「国解」を奉って、頼時を討ち滅ぼした様子を言上して述べた。「頼時は流れ矢にあたって鳥海の柵に引き返して死にました。しかしながら、残党は今なお服しておりません。官符をお出し・たおされ
で諸国の兵士を招集し、合わせて兵粮を納めさせ残党をすべて討伐しようと存じます。官符を賜り次第、兵粮を徴収し、軍勢を出発させましょう」と。

（１０）将軍、黄海で敗北、八幡太郎義家奮闘す

しかしながら諸卿の協議が整わず、頼時誅滅の功の行賞もないままに、天喜十一月に将軍は千八百余人の兵を率いて、安倍貞任らを攻めようとした。

貞任らは精鋭の兵四千余人を率いて、河崎の柵を陣営として黄海で防ぎ戦った。長征の軍と地元の軍という情況が異なっているだけでなく、衆寡の兵力差もあった。官軍は大敗して戦死したもの数百人を数えた。

この時、頼義将軍の長男義家の強く勇ましいことは抜群であり、馬を走らせ弓を射ることは神技のようであった。賊兵は風に倒されるくさのごとく気圧されて逃げ、刃向おうとする者もいない。東夷は称号を捧げて「八幡太郎」と呼んだ。

賊兵は二百余騎で左右に展開して鶴翼の陣を張って将軍らを囲んで攻め、襲い来る矢は雨のごとくである。このような戦況でほとんと脱出できそうもなかったが、義家が続けざまに賊兵を射殺し、さらに大矢光任ら数騎の兵が死を賭して戦ったから、賊兵は神かと見て次第に兵を退いて去った。

（１１）将軍の家臣、経範、景季らの忠節

この時、官軍の中に散位の佐伯経範がいた。相模国の住人で、将軍は手厚く遇していた経範は「私は将軍に仕えてから、三十年になる。今、戦いに敗れて滅亡なさろうとする に、運命を共にしないでいられようか。冥土にお供するのが私の望みである」と言って って返して賊兵の囲みの中に入った。

藤原景季は、景通の長男である。獰猛な敵将を打ち取っていたが、乗り馬が躓き倒れ 兵に捕えられた。将軍側近の武士であることを憎み斬殺した。

散位の和気致輔や紀為清らも、皆必死すべく激戦の場に入って万に一つの命を助かろ と思わない勇士である。皆将軍のために命をすてたのであった。

（１２）藤原茂頼、俄かに出家し、主の屍を探す

また藤原茂頼は、将軍の腹心で、力強く勇ましくて戦巧である。茂頼は「はや敵の手 罹って落命されに違いない」と考え「私は殿の亡骸を探し、埋葬することにしよう。し し戦場では、当然僧形でなければ、入って探すことはできない。今となっては鬢髪を剃 落として殿の亡骸を拾うばかりだ」と。

そこでやにわに出家し僧侶となり、戦場へ出かけた。ところが途中で将軍に行き逢った 歓び涙して将軍の後について逃げてきた。

（１３）平国妙、生虜となる

散位の平国妙は、出羽の人で、日頃は無勢で多勢の敵を打ち負かしてきた。今まで負 て逃げたことがないから、世の人々は号して「平不負」と言っていた。ところが乗馬が て、賊軍に捕えられた。賊将の清経は、国妙の甥である。この縁で命を助けられ武士た はやはりこのことを恥辱と評した。

※戦闘の最中に馬が倒れて生け捕りになった国妙は、自ら助命を望んだのではない が、甥が敵方にいたことにより処刑されなかった。それでもおめおめと生きて帰 ったものとして、武士たちは恥すべきことと考えたのである。

（１４）天喜五年十二月の国解、援なきを訴える

頼義朝臣は、「国解」を奉って、「諸国の兵粮と兵士を徴発したという言葉はありま が、送られてきたいう実態はありません。この陸奥国の人民は、ことごとく他国に逃げ 軍役につきません。先ごろ出羽の国府に処置を求める公文書を送りましたのに、出羽の 守、源朝臣兼長は、全く陸奥から逃げ込んだ者たちを取り締まろうとの気がないのです 兼長に対する御沙汰を頂かねばどうして東夷討伐をできましょう」と奏上した。

そこで朝廷は、兼長朝臣を解任し、源朝臣斎頼をで出羽の国守に任じて、陸奥の国守 義と協力して安倍貞任を追討させようとした。

（１５）貞任らの横行に、将軍、清原武信を頼む

しかし斎頼は特別に抜擢されて出羽の国守を拝命する恩を受けながら、全く貞任征伐 気持ちがない。

貞任らはいよいよ奥六郡を勝ってに仕切って、その民を脅かして物品を収奪した。

なかでも経清は数百の武装兵を引き連れて、衣川の関を超えて南下し、陸奥の諸郡に いを行かせて、国に献納すべきものを奪い取った。人民に命じて「白符を用いよ。赤符 用いてはいけない」と布告した。

※「白符とは、経清の発行する私的な徴税の証書である。官印を押していないから 白い符という。「赤符」は、陸奥の国府が発行した徴税の証書である。国印を押 してあるから赤い附といったのである。

将軍は経清の横行を制止できなかった。

しかし、出羽山北の俘囚の首領清原真人光頼と、その弟武則らを言葉巧みに説いて、 軍に味方させようと努めていた。光頼らはためらい決断しなかった。将軍は常に奇品珍 を贈っていたので、光頼と武則らはようやく官軍に味方することを聞き入れた。

金濱興一の「北方に民２」

□エミシ・エゾ、アイヌの文化 札幌大学助教授 石附喜三男（1938～1986）47歳没

縄文式土器に対して、擦文式土器というものが存在する。

そういう土器の存在する文化を擦文式文化と呼んでいる。

この擦文式文化は北海道における一番最後の土器文化であると言えるだろう。

北海道のオホーツク海沿岸には、オホーツク文化と呼ぶ明らかに擦文式文化とは異なる文化が併存していた。

この二つの文化は、北海道における最後の土器文化であったと言えるだろうが、擦文式文化というものは、いろいろな点で後世のアイヌ文化と非常に密接なつながりがあると考えられている。

アイヌ文化のかなり大きな部分が、擦文式文化において形成されたものではないかと私は考えている。

そしてこの文化は８世紀の後半に始まり、大体１３世紀に終わったと考えている。

これには色々な説があり、早稲田大学の桜井清彦先生はもう少し後、室町時代まで続いたとの説を出しておられる。それから北海道の道南部と道東・道北による文化の地域差があり、道東・道北においては江戸時代まで残っていたとの考えもあるようである。

私は一応１３世紀、鎌倉時代の後半までに終わりを告げたと考えている。

（北方の古代文化　毎日新聞社）

□樺太アイヌ（サハリンアイヌ） かつて樺太南部に居住していたアイヌ系族

アイヌ文化が成立する以前、樺太・北海道・千島にはオホーツク文化人が居住しており、彼らは中国から流鬼、日本からは粛慎（ミシハセ）と呼称されていた。

樺太アイヌは、かつて樺太南部に居住していたアイヌ系民族で、現在は住む場所により、北海道アイヌや千島アイヌとも呼ばれている。

この樺太アイヌは北海道アイヌや千島アイヌと異なる文化・伝統を有することで知られている。「トンコリ」という五弦の琴や「ミイラ葬」の風習は、アイヌ文化の中でも樺太アイヌにしか伝承されていない。

１９４５年のソ連による樺太占領によって、北緯５０度以降の日本領に住んでいた大多数の樺太アイヌは南へ逃れ、以後は北海道各所に散在している。

出典：フリー百科辞典『ウィキペディア』

樺太と周辺の関係

「樺太アイヌ」または「サハリンアイヌ」の名前で知られているものの、実際には樺太全域に居住していたわけでなく、特に樺太南部に集中して居住していた。これは樺太アイヌの祖先が先住民(オホーツク文化人＝ニヴフ)を北方へ押しのける形で北海道から樺太へ進出していった歴史が関係している。１３世紀から近代に至るまで、樺太では樺太アイヌ、ウィルタ(オロッコ)、ニヴフの３民族が共存していた。

また、樺太アイヌは前近代には北海道に日本海沿岸部にも居住していた形跡がある。河野広道(史学者)の調査によると近代においても樺太アイヌと余市アイヌは墓標の形が同じであり、これは両者が同一の文化圏に属するグループに属することを示唆する。

１７世紀、アイヌ軍が松前藩へ蜂起したシャクシャインの戦いには余市・利尻・宗谷にかけてハチロウエモンらに率いるアイヌ民族グループ(研究者は「余市アイヌ」と呼称した)が存在したが、これも樺太アイヌに連なる集団ではないかと考えられている。